

# 大国の若者たちはどこに向かうか

劉 蘇里

1940年代以降、学術界では歴史や記憶についてさまざまな理論が生まれたが、今日、この場でそれを一つ一つ振り返るつもりはありません。今日は自分が実際に経験したことをお話しし、それが今日の中国にとってどんな意味があるのか、そして学者や思想家、および出版業界の人々がいかにそれを軽視し、集団的な意識の欠如がいかにもたらされ、そしてそれがいかに私たちの文化の一部になったのかをお話ししたいと思います。

まず一つ目の経験談は、最高学府の大学に学ぶ若者二人についての話です。7年ほど前、学生会役員の学生が自分の文化イベントの支援をしてほしいと本屋を訪ねてきたことがありました。その話の後、私がその学生に、卒業したら一番したいことは何かと尋ねると、その学生は家を買って母を北京に呼ぶことが人生の一番の理想だと答えました。また、4年前には、同じ大学で最もレベルが高い文科系のクラスに所属する、その年に卒業予定だった学生が私の本屋を訪れました。その学生にどんな本を読んでいるのか尋ねたところ、これといって読む本もなく、何の本を読んでいるのかもわからないと答えていました。その後、中国近代史や中国共産党史について話し、中国共産党の高級幹部である薄一波の話題になったのですが、その学生は即刻私に薄一波は溥儀の一族だと言ったのです。

みなさんは私がそのとき、いかに愕然としたか想像がおつきになるでしょう。最高学府の最高クラスの文科系の卒業生が、字面だけみて勝手な解釈をして、薄一波の「薄」という字を溥儀の「溥」の字と同じものだと考えたばかりか、同じ一族だと見なしたのです。もう一人の学生会役員にしても、最高学府のエリートが母親を北京に迎えることを自分の一番の理想に掲げるなんて、将来の国家の建設と運営は一体誰に任せればよいのでしょうか。冷や汗をかきたくなるようなことばかりです。

もう一つ、巷でもよくあることですが、私の家庭でのことです。この数年、中国の家政婦の相場

が高騰し、パートタイマーでも、住み込みでも、いわゆる「月嫂」〔産褥期のホームヘルパーのこと〕でも、その給料の増加幅はいかなる一般の職業をも上回っています。今年の平均レベルは有名大学の新卒月給の大半を上回り、2800～3000元、ドル換算で424～455ドルという記録的なレベルに達しています。「月嫂」にいたっては、その最高月給はなんと15000元、2273ドル相当にもなるといいます。これは、どの大学の一流の教授の収入よりもまだ高いというレベルです。私の手元には正確な比較統計データもありませんし、家政婦の収入について何の評価もするつもりはありませんが、ただ、これで私の家で働いてくれているパートタイマーや住み込みのお手伝いさんの状況がおわかりいただけたかと思います。

ここ4年の間に、我が家で雇ったことのある家政婦は少なくとも20人になるでしょう。最長で2年近く、短い者では半日でした。そのうち、料理ができるもの——手馴れていて味がまあまあという基準ですが——合格だったのは4人しかおりません。普通の掃除ができるのが、半数以下。家事全般をこなせるのが、2人だけ。この家政婦のうち、15人が農村出身で、5人が都市の出身、年齢はほとんどが19歳から40歳前後の間でした。この4年のうちに1ヶ月目の月給が住み込みで800元であった給与が、今ではパートタイムで2600元となっています。

このような家政婦の人たちは、最低限の労働技能である農村の労働経験にも欠けていながら、非常に短期間の研修を経て、いとも簡単に都市の家政婦という職業に適応しているといってもよいでしょう。このような家政婦の大部分は家事も知らず、衛生についての概念もありません。このような人たちは労働者としては「不用品」のようなものです。このような「不用品」は労働者階級の間だけではなく、都市の新世代ではより多く見受けられます。これも私が実際に経験したことです。私の知っている少年・少女や若者はほとんどが家事について基本的な意識も能力もなく、最も簡単

な床拭きや皿洗いでさえ、できるものは数少ないのが実情です。あるとき、私が若い店員にテーブルを拭かせたところ、テーブルの足を拭いてから、それでテーブルの上面を拭いたということもありました。

遠まわしな話はここまでにします。ここ数年、中国大陸では、全国をにぎわすような大きな事件がいくつも起きています。その犯人はみな非常に若い青少年です。まず一つは「薬家鑫事件」です。薬家鑫は陝西省の大学生ですが、夜間に車を運転し、ある女性労働者をひいてしまい、その場で助けなかったばかりでなく、女性がまだ生きていることがわかると、7回もナイフで刺して死亡させたというものです。もう一つは、北方のある省都で起こった事件です。20歳すぎの若者がキャンパス内で飲酒運転をし、四方八方にぶつかって、女子学生1人をその場で死なせてしまったというものです。怒った学生がその車を阻止すると、その犯人の学生は人だかりに向かって、「俺のおやじは李剛だぞ！」（李剛は現地の公安局の副局長だそうです）と叫んだといひます。また、中部のある省で起こった事件はさらに恐ろしいものです。それほど歳のいかない国家公務員がこれも飲酒運転で人をひいてしまいました。その公務員は被害者がまだ生きているとわかると、何度も前進とバックを繰り返し、被害者をその場でひき殺したのだそうです。

新興の大国の「新人類」にはまだまだ奇怪な話があります。次は若者の考え方についてお話しさせてください。これも私の店員ですが、日ごろは人とあまりかかわらず、自分の仕事をしているときには、どうもいつもぼうっとしているようです。そこで、ある日、「何か心配事でもあるのか、それともこの本屋で働くのが嫌いなのか」と聞いてみました。ところが、どちらでもないといひます。「何か考えていることがあるのなら、言ってみてくれないか」と言うと、「劉総経理、俺、皇帝になりたいんです」と言うんです。「なぜだい？」と尋ねると、「皇帝は仕事をしなくても、毎日食べて寝て遊んで、好きなことができるからです。」と答えたのです。ある権威ある調査結果によると（アンケートに答えたのはほとんどが18歳未満の高校生でした）、国に必要とされたら、国のために何で

もしますかという問いに対し、みなさん意外に思われるかもしれませんが、なんと95%がイエスと答えています。また、ある社会学者が東南地域のある省の大学生を対象に調査を行ったところ、大学の卒業見込みの学生中、「愛人として養われる」ことに賛同するかどうか聞いたところ、3分の2以上の女子大学生がイエスと答えたといひます。それから、よく知られた話ですが、卒業見込みの大学生のうち4分の3までの学生がまず国家公務員を第一の選択肢と考えています。ある記者によると、その記者の故郷の同級生は最高で5年続けて試験を受け、望み通り国家公務員になれた人もいひそうです。

ここまでの例は大国の新人類のすべてではありません。むしろ、氷山の一角、ほんの一角にすぎないといひます。これまでの話を聞いて、一体どうしてこうなってしまったのか、もしくはこのような問題は各レベルの役所や社会の民衆がその存在を認識している一般的なものなのかどうか、との疑問をお感じになるでしょう。私が抱く問いは、若者の問題は若者の責任なのか、それとも家庭の責任なのか、社会の責任なのか、それとも政府の責任なのか、ということです。私は答えは明らかだと思ひます。まずは親、特に私のこの年代の親に問題があります。私たちこの年代の人は貧乏や苦労を経験して成長してきたので、自分の子どもには自分のような苦労や嫌な思ひはさせたくないと思ひています。また、中国の経済発展の黄金期とも重なり、物質的な条件は天地の差です。私たちは子どもたちの物質的な生活は改善してあげましたが、それ以外のすべての品質、品性を見守り、育てることを軽視してしまいました。それから、次に中国の教育体制にも問題があります。「発展こそがゆるぎない道理である」という〔鄧小平の唱えた〕国家戦略同様、学生にとって、学校で行われていることは「高得点こそがゆるぎない道理」なのです。また、お手本としての大人すべての若者に対する作用もあります。その中心的な価値観は、人に対する最も高い評価基準は「成功」であり「英雄はその出身を問わず」ということであり、成功にいたるまでの過程におけるその他の要素に関心をもつ人はいひません。機会があれば、中国の各地の大小の書店や空港の書店、ネット書店を見

てみてください。一番多いのは何か。それは励ましという旗を掲げた「成功学」の本です。この点からわかるのは、中国大陸の出版界は、価値や道徳を問わない「成功こそがすべて」という大合唱に参加しているということです。

大人たちがこれに気づいていないとは言い切れません。それだけではなく、大人はこのような例における最も重要なバックグラウンドをなしており、それを支える力なのです。しかし、このような例についてどう考えるか、どの大人に聞いても、答えはここにご在席の皆様とそう変わりがないのも確かです。逆説的なことですが、私がお話しした例に含まれるマイナス面は、誰も好まないにもかかわらず、実はほとんどの人がこれらの物語のうちの一つの役を担っており、そのうえ、それをうまく演じているのです。

生き生きした例を前にすると、すべての理論がどれも非常に無意味に感じられます。それでも、私は社会学者David Carl (デビッド・カール) の「群集は「主体」として自己反省意識を得る」という言葉を引用したいと思います。デビッド・カールが言うことには、経験や活動を通じて自己を保持するうえに、全体的関連をも備えた存在であるような「大我〔個人を指す“小我”と対比される形で用いられる集団を指す概念〕」に関する叙事的な報告があるところでは必ず、一つの集団が存在しているとのことであります。私はこの言葉について、ここで以下のコメントを述べさせていただきたいと思います。ここで申し上げているような意義においては、最も集団主義を重んじるはずの中国には、本当の意味での集団は従来存在したことがございません。なぜならば、文学でも哲学でも、大我に関する記述がほとんど見受けられないからです。根本的に、中国には大我は存在せず、小我しかありません。そして、その小我はどのくらい小さいのでしょうか。それは西洋の意義でいう個人主義とは比べようがなく、現代社会においてアトム化 (atomized) された個人の利己とも比べ物になりません。それは古くからの私利私欲に根本を發しており、おそらく役人を怖がること以外には、いかなる意義においても、自主性や集団意識と呼べるものではありません。カールの思考に沿っていけば、私たちはこの問題についてより深い点から

掘り起こすことができるかもしれないのです。

(りゅう そり・北京万聖書園図書有限公司)

## 劉蘇里 (Liu Suli)

江蘇省徐州の人。1960年黒龍江省饒河県に生まれる。1983年に北京大学を卒業。1986年に中国政法大学を卒業。1993年に「万聖書園」を創立。2002年に万聖一醒客文化伝播公司を創立。現在万聖書園図書公司取締役。中国大陸における『新世紀』、『信叢』、『南方週末』、『中国週刊』、『投資者報』、『改革』など新聞誌のコラムニストや特別依頼執筆者であり、また中国大陸では影響力のあるメディア年度末図書審査委員である。「中国と周辺世界」研究グループメンバー。世界政治評論叢書『大観』の設立に参加。4部からなる『対談録』がまもなく出版される。